



次期全銀システムの国際標準化への取り組み

(社)東京銀行協会 増田 豊

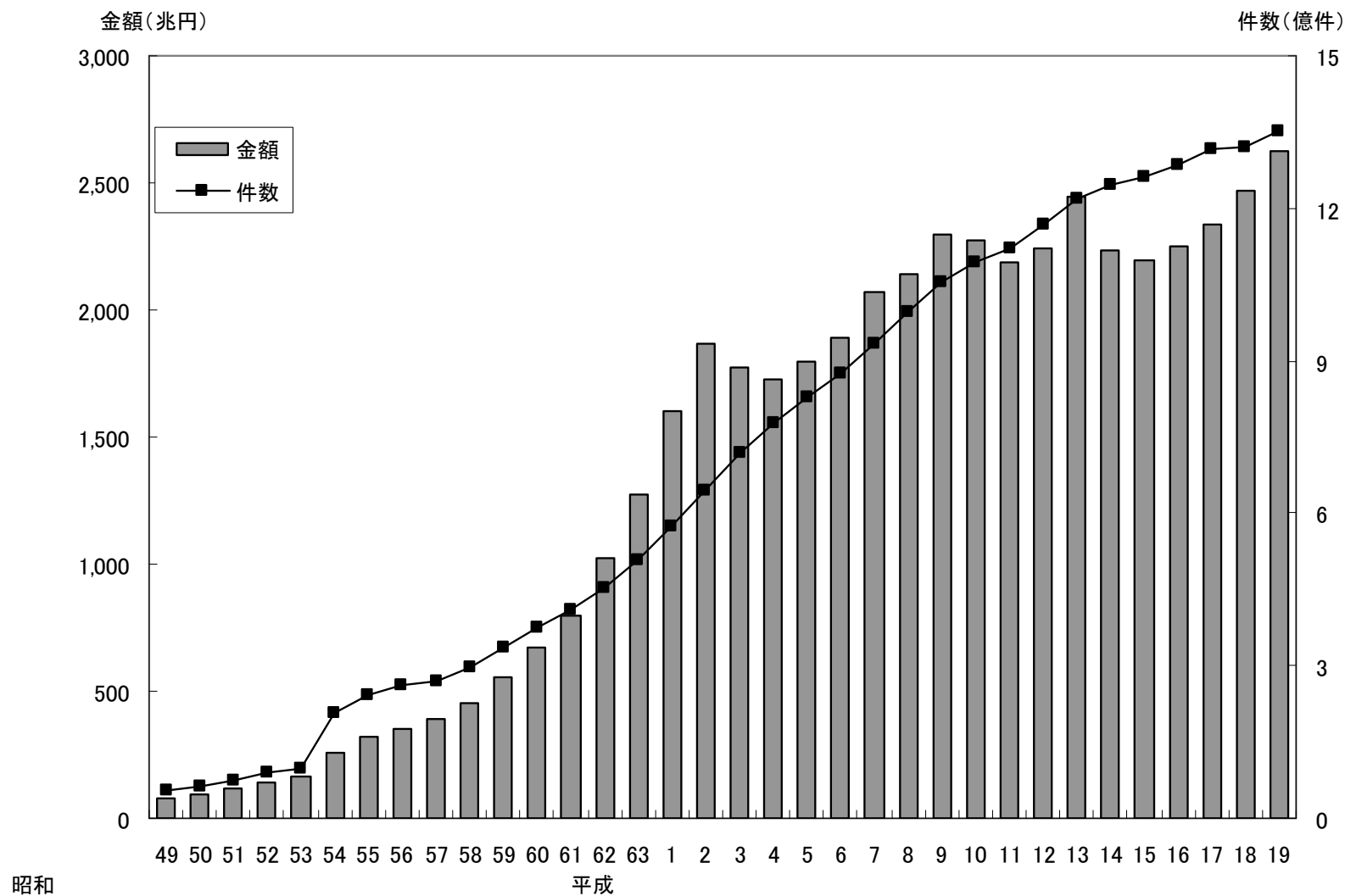
本資料の内容や意見は発表者の個人的見解を含むものです。
東京銀行協会の公式見解を示すものではありません。

全銀システムとは



- 国内の金融機関の「振込」等の為替通知の授受と決済を行うシステム
- 1973年4月に稼動(36年目)
- 参加金融機関：国内のほぼ全て
ただし、外国銀行はシティバンク銀行を含めても5行
(J.P.モルガン、アメリカ、香港上海、ドイツ)
- 取扱高 年間 約13億件、約2,600兆円
(1件平均 200万円)
(ピーク時 1日 1,500万件)

全銀システムの取扱高の推移



次期全銀システムの新たな取組み



① システム基盤の見直し

- ⊕ SOA (Service Oriented Architecture) の手法により、システム基盤を業務コンポーネント単位で再構築
- ⊕ これにより以下の効果
 - ◆ システムの改修に伴う影響の局所化
 - ◆ 新規業務開発への対応柔軟化

顧客や銀行のニーズの高度化
変化に柔軟に対応

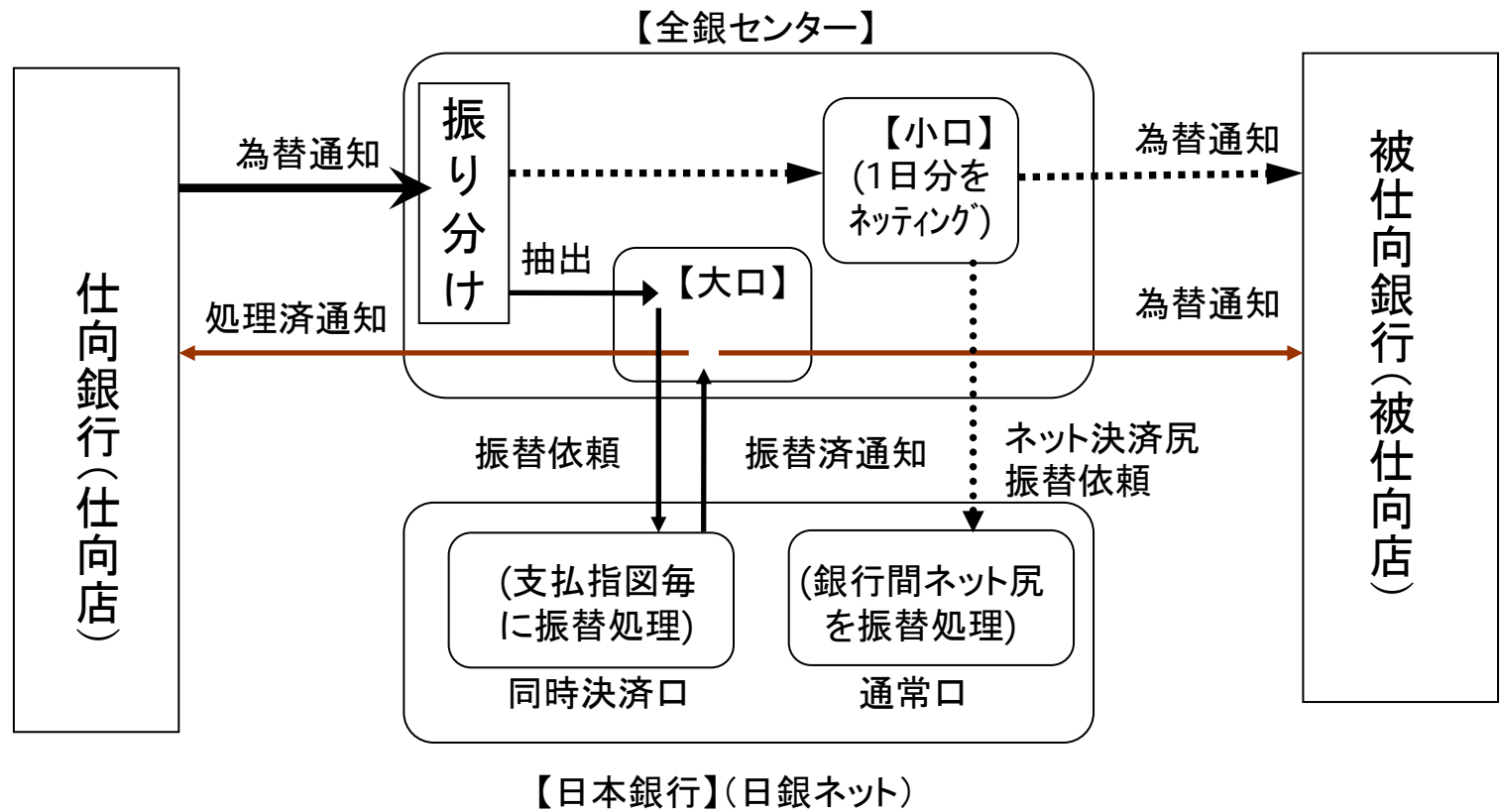
次期全銀システムの新たな取組み



②大口取引へのRTGSの導入

- ⊕ 1億円以上の大口内為取引を日銀当座預金(同時決済口)で即時決済
- ⊕ これにより以下の効果
 - ◆ 銀行間の日中決済リスクの削減
 - ◆ 決済不履行に備えた「担保」や「流動性供給スキーム」の縮小

わが国決済システムの安定性強化
重要決済システムに関するBIS基本原則対応



次期全銀システムの新たな取組み



③ISO20022・XML電文の採用

- ⊕ 新規の電文に国際規格 (ISO20022) が制定されているXML (Extensible Markup Language) フォーマットを採用
- ⊕ これにより以下の効果
 - ◆ 国際規格フォーマットによる利用者の利便性向上
 - ◆ 外部システムとの接続設計の柔軟性向上

国際規格に準拠した通信メッセージの採用

次期全銀システムの新たな取組み



④EDI情報の拡充

- ⊕ XML電文により、従来の20桁のEDI情報を140桁の繰り返し利用可能に
- ⊕ これにより以下の効果
 - ◆ 桁数増加による利用者の利便性の向上
 - ◆ データ交換における国際標準化を実現

EDI情報の利用の活性化

次期全銀システムの新たな取組み



⑤ ネットワークの見直し

- ⊕ IP-VPN網の採用
- ⊕ 事実上の標準通信プロトコルであるTCP/IPプロトコルの採用
- ⊕ これにより以下の効果
 - ◆ 安全性を含めた費用対効果・対外接続性の向上
 - ◆ ATM網などとのネットワーク共用化の推進

最適な技術による標準的通信手段の採用

次期全銀システムの新たな取組み



⑥新ファイル転送の導入

- ⊕ 銀行間のバッチ転送システムとして、現在のMTデータ伝送から「新ファイル転送」に切り替え
- ⊕ これにより以下の効果
 - ◆ 低価格で大量送信可能な伝送手段を提供
 - ◆ BCPとしても活用可能

大量送信のニーズに応え、利便向上

次期全銀システムの新たな取組み



⑦試験環境の整備

- ⊕ 商用マシンとは独立した試験用マシンを設置
- ⊕ これにより以下の効果
 - ◆ 試験期間の短縮化・試験スケジュールの柔軟化
(日中帯の試験が可能)
 - ◆ 新規業務・システム開発の期間短縮

試験ニーズへの対応
システム対応の迅速化

国際標準化の取組み目標



通信メッセージ・通信手段の国際標準化

利用者利便・外部システムとの接続性の向上

内外に開かれた決済システム
国際競争力のある決済システム

おわり



- ⊕ 以上で説明は終わりになります。
- ⊕ ご清聴ありがとうございました。